
天国へのカウントダウンから始まった

魔法戦隊三輪野助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国へのカウントダウンから始まった

【Nコード】

N2030C

【作者名】

魔法戦隊三輪野助

【あらすじ】

天国へのカウントダウンから勝手に考えた後日の話…

日本で最も高く聳えて天国に近いと云うツインタワー
その高層ビルでは、ジンの銃撃が原因となった込み入った事件が起きた。

壁に弾丸が貫いた事からエレベーター故障が起きて事態が起きた。
それから、僅かな可能性に掛けてビルからの脱出をした。
現在は、それから2日の時が過ぎた。

今は、学校の授業は終わってそれぞれの帰路へと向かっている途中。

他愛も無い会話が重なった状態で聞き通る。

勿論少年探偵団一同も他愛も無い日常の話題を繰り広げては、話している。

その後ろには、見ための年齢に会わず冷然とした態度を表示している小学生が二人。

実年齢が小学一年生ではないと云うのもあるが示す態度に駆け離れたものがあつた。

「おお——うな重じゃねえかよ！」

歩いている途中に間の抜けた歓声が耳に通じて不意に声の響いた方向へと振り向く。

一同が振り向いた矢先には、店の前に置かれたガラス棚の中のような重の模造品に興味津々に見据えていたガキ大将がいた。

そんな他愛も無い光景を目にして一斉に呆れる。

”その光景”を見慣れて気疲れたのか肩の力を抜く。

「元太君…君はうな重の事ばかりですね…」

「そうよ。元太君もうすぐ家よ」

光彦と歩美は、苦笑い混じりで元太に訴えかける。

元太の目の前に来て諭すような口調で呟く。

「いいんじゃないかよ。腹減ったんだからよ…」

自分の弱点を付かれた事を隠すかのように言い返す。

照れのせいか頬が赤らみを帯びている。

「でも、元太君給食沢山おかわりしたでしょ？」とか

「君は食いしん坊ですね」等々の他愛の無い言葉の投げ掛けを繰り返す。

そんな呆気ない姿を見据えているコナンは退屈そうに立ち尽くす。

（こいつら、本当に元気だよな）

微かに苦笑いを浮かべては、ため息をまじえる。ざわめいた少年探偵団一同を凝視して呆れた様子になる。

それからは、いつもの仕草でポケットに手をつ込む。

「オイ、おめーら行くぞ」

なかなか対話を割り切らない少年探偵団に対して伸びた感じのない語調で呼び掛けをする。

虚ろな目をして退屈である事を表した態度に変える。

訳もなく不満足そうな態度にして通学路の道を通る。

コナンの言動に従うように続いて一步一步足を運ぶ。

「でも、灰原大丈夫か？お前言うていたじゃねえかよ。『私には、席がない…』とか何とかかんとか…それに脱出する時だってお前車に乗るのを拒んでいたしよ…。どういう意味なんだ？『私には、席がない…』ってどういう事だ？」

歩いて間もない時に元太が何気なさそうに質問を訊ねる。

ストレートな問いかけをした元太に対して灰原は見据える。

暫くの間、唇を噛み締めて出る声を封じた状態にする。

一旦元太を視界内から見えなくなるように顔を逆の方向へと向ける。顔の角度を斜め下に向けてうつむいた姿勢にする。

それから、口元を歪めて軽く『ふっ』と不意に声をこぼし自嘲する。

「別に何でもないわ。今は、私も気にしていないから大丈夫よ」
笑みを漏らした時と連続していつもの声のトーンで冷静沈着に語る。それと 동시에 灰原の茶髪がリズム良く揺れるように靡く。清爽な風が流れるように吹き渡る。心地よさを実感する。

「あつ、コナン君…僕達、家此方だから……」

「おう。じゃーなおめーら」
仲の良い同級生同士の別れのような雰囲気それぞれの家路がある方角に別れる。

別れを済ませた後、一安心した安心感を持つ。肩の荷が下りた感じ

がする。

周りに会話が聞き取られないかの確認の為に四方八方見渡す。
何も無い事の確認をしてから念を押して小声で囁く。

「なあ、灰原：本当は奴等の事について…」

「ええ…」

コナンの囁いた言葉を遮って応答をする。

コナンよりも声をひそめて語調に震えが入る。

「彼らの事だから今、必死になって元の私を探している筈よ。しかも、あの時園子さんが私と同じ髪型にしていたから園子さんが…」
さつきよりも微妙に声のトーンを下げて話し掛ける。

「いや、まずそれは断じて有り得ねーだろ。脱出したあと、ジンは一切行動を起こさなかった。エレベーターが故障した時に気づいたんだよ。人違って事に…園子の行動範囲を見てあれは紛れもなく別人だってそれに園子を殺したいのならばもうとつくの昔に殺しているだろうしな」

分かりきった口調で語る。

その後に灰原の居る方向を一瞥する。

その瞬間に脳裏に幾度なく殺戮を繰り返していた黒の組織を浮かべる。

（でも、奴等は限りなく灰原を探し続けている。見付かるのも時間の問題だ。早く奴等をぶっ倒さなければならねえ…灰原の為に）
一旦落ち着くようにして毛利探偵事務所の方角に視線を送る。

——『生きて新一を待つ』

その決意を胸に刻んだ蘭の思いが鮮明に甦る。

——” 蘭の思いを無駄には出来ない。” ——
その決意を受け止めて思い浮かべる。

（あと、オレを待っていてくれる蘭の為に絶対奴等を倒さなければならねえ。いや、黒の組織だけは、必ずオレが倒す！！）
コナンは歩みを遅くしてから一旦止まる。

「どうしたの？」

「いや、別に…何でもねえ…」

何度目なのかこの日は強く誓った。

黒の組織を倒す。そして、待ち続けている蘭の為に、恐怖に怯える
灰原の為に

（後書き）

お久しぶりです

テストも中間期末と終わったので今の内にとりあえず久しぶりに小説書きました。テストの結果は余裕こいていたくせに結果は伴っていないです殆んどケアレスミスです（多分問題を見ると落ち着きがないんで。問題事態はまあ簡単でした

受験生なので連載は当分無理なので短編を投稿しました

文章はみつともないし、作品も展開が早く感じます。そりゃ色々な意味で焦っています。小説を投稿すると言っても今の内にしか投稿できません。某塾での岐阜模試のテスト勉強があるんです

僅かの時間でまた機会があれば短編小説を投稿したいと思います。

出来なければまた来年にお願い致します

ちよっただけですが一声掛けて下さると心優しいかたがいれば大変嬉しいです

忙しい中感謝しています

なるべく短編小説でも短くしたいと思います。では、これで失礼します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030c/>

天国へのカウントダウンから始まった

2010年10月11日22時59分発行